

日本フランス語フランス文学会
2016 年度春季大会
2016 年 5 月 28 日 (土)・29 日 (日)

会 場：学習院大学 目白キャンパス
〒171-8588 豊島区目白 1-5-1

第1日 5月28日 (土)

受 付 11:30~16:00 西2号館3階ロビー

開会式 13:00~13:15 西2号館3階302

司 会 学習院大学 大野 麻 奈 子
開会の辞 学習院大学 野 村 正 人
開催校代表挨拶 学習院大学 神 田 龍 身
会長挨拶 大手前大学 柏 木 隆 雄

研究発表会 西2号館4階・5階

第1部 13:30~14:30

第2部 14:45~15:45

テーブル・ロンド 16:30~18:00 西2号館3階302

ヌーヴェル・ヴァーグを総括する
——文学との関係において

司 会 中 条 省 平 (学習院大学)
発表者 野 崎 欽 (東京大学)
三 浦 哲 哉 (青山学院大学)

懇親会 18:20~20:20

会場：学習院創立百周年記念会館3階小講堂

第2日 5月29日 (日)

受 付 9:30~15:00 西2号館3階ロビー

ワークショップ 10:00~12:00 西2号館4階・5階

特別講演 13:00~14:45 西2号館3階302

José-Luis DIAZ (Université Paris-Diderot)
« Les Victimes du livre »

司 会 ティエリ・マレ (学習院大学)

総 会 15:00~16:30 西2号館3階302

議 長 千葉大学 高 橋 信 良

閉会式 16:30~16:40 西2号館3階302

会長挨拶 大手前大学 柏 木 隆 雄
閉会の辞 学習院大学 田 上 竜 也

大会本部：学習院大学文学部フランス語圏文化学科研究室

Tel: 03-5992-1099

e-mail: haru2016gakushuin@gmail.com

当日連絡先: Tel: 03-5992-1099

一般控室: 西2号館3階306

賛助会員展示会場: 西2号館3階304・305

■ 大会費：1,000円

■ 懇親会費：別紙「大会費等の振込について」を参照
いずれも同封の振込用紙にて、5月13日 (金) までにお
振込みください。

■ 大会参加にあたり、招請状の必要な方は学会事務局
(sjllf@jade.dti.ne.jp) までご請求ください。

■ 委員会・役員会については、学会事務局よりご連絡いたし
ます。

■ 昼食：5月28日 (土)、29日 (日) 両日とも会場周辺の
飲食店が営業しておりますので、お弁当のご用意はいたし
ません。

日本フランス語フランス文学会 2016 年度春季大会

研 究 発 表 会 プ ロ グ ラ ム 5月28日(土)

	第1部 (13:30~14:30)	第2部 (14:45~15:45)
	語学・16世紀	19世紀C
西2号館 5階 506	司会：井元秀剛（大阪大学） 1. 対立を表わす連結辞——その生起環境の記述から 田代雅幸（筑波大学博士課程） 司会：志々見剛（日本大学） 2. 霊草パンタグリュエリオンの自然魔術と科学技術的創意性——ラブレ『第三の書』とカルカニーニ「リネラエオン」との比較を通して 関俣賢一（東京大学助教）	司会：海老根龍介（白百合女子大学） 1. 定型詩の「定性」——ヴィラネルをめぐる 五味田泰（慶應義塾大学非常勤講師） 2. ランボーにおける「変身」について 塚島真実（東京大学教務補佐員）
	18世紀・19世紀A	19世紀D
西2号館 4階 403	司会：小関武史（一橋大学） 1. ヴォルテールのクレヴィヨン悲劇への批判 渋谷直樹（関西大学非常勤講師） 司会：吉村和明（上智大学） 2. マルスリーヌ・デボルド＝ヴァルモールにおけるヴィクトル・ユゴー 岡部杏子（早稲田大学助手）	司会：小倉孝誠（慶應義塾大学） 1. バルザックにおける動物比喩表現 沖久真鈴（成城大学博士課程） 2. アナトール・フランス作品における植民地主義者 澁谷与文（学習院大学非常勤講師）
	19世紀B	19世紀E
西2号館 4階 405	司会：吉田典子（神戸大学） 1. エミール・ゾラとエクトール・マロ——登場人物の強制入院と発狂の描写をめぐる 梅澤礼（立命館大学嘱託講師） 2. ゾラ「エクラン理論」再考——1850年代の写実主義との関連から 實谷総一郎（日本学術振興会特別研究員）	司会：中畑寛之（神戸大学） 1. 「文学基金」再論 立花史（早稲田大学非常勤講師） 2. アルフレッド・ジャリの『昼と夜』における幻覚 佐原怜（パリ第4大学博士課程）
	20世紀A	20世紀C
西2号館 5階 503	司会：田上竜也（学習院大学） 1. ヴァレリーの詩における夕暮れ時 鳥山定嗣（九州大学助教） 司会：吉川佳英子（京都造形芸術大学） 2. 『失われた時を求めて』における演劇の記憶 福田桃子（日本学術振興会特別研究員）	司会：中里まき子（岩手大学） 1. 「クリナメン」について——ウリポ、ペレックの「反前衛的」遊戯 前山悠（学習院大学非常勤講師） 2. 重さと軽さの弁証法——シモーヌ・ヴェイユとミラン・クンデラ 今村純子（一橋大学非常勤講師）
	20世紀B	20世紀D
西2号館 5階 504	司会：若森栄樹（獨協大学） 1. ジャック・ラカンによるケーフォンテヌ三部作の注釈について 桑原旅人（東京大学博士課程） 2. 死にゆく者と生き残る者の共鳴——闘牛に示されたジョルジュ・バタイユの内的体験 宮田渚（京都大学博士課程）	司会：岩切正一郎（国際基督教大学） 1. ジャン・アヌイとその観客——観客の快楽について 大谷理奈（慶應義塾大学博士課程） 司会：鈴木雅生（学習院大学） 2. 魂の喪失——90年代初頭におけるル・クレジオのアニミズム的展開について 櫻井典夫（国学院大学北海道短期大学部非常勤講師）

研 究 会 5月28日(土) 10:00~12:00

- ・ヴァレリー研究会（西1号館3階315）
- ・日本スタンダード研究会（西1号館3階302）
- ・バルザック・サンド合同研究会（西1号館3階305）
José-Luis Diaz : « Balzac et Sand : deux écrivains en vitrine (1831-1850) »
Brigitte Diaz : « Balzac et Sand : deux romanciers en correspondance »
- ・日本カミュ研究会（西1号館3階316）
- ・パスカル研究会（西1号館3階307）
- ・フローベール研究会（西1号館3階304）
- ・日本フランス語学会シンポジウム（西1号館3階301）
- ・18世紀フランス研究会（西1号館3階314）
- ・日本クロードル研究会（西1号館3階306）
- ・ラブレール・モンテーニュ・フォーラム（西1号館3階310）
- ・日本プレスト研究会（西1号館3階309）
- ・バタイユ・ブランショ研究会（西1号館3階308）
- ・日本マラルメ研究会（西1号館3階303）

日本フランス語フランス文学会 2016 年度春季大会

ターブル・ロンド 5月28日(土) 16:30~18:00

西2号館3階302

ヌーヴェル・ヴァーグを総括する——文学との関係において

司会：中条省平（学習院大学）

発表者：野崎敏（東京大学）、三浦哲哉（青山学院大学）

今年1月、ジャック・リヴェットが87歳で亡くなった。リヴェットの死をもって、ヌーヴェル・ヴァーグの主な4人の映画作家（ロメール、リヴェット、シャブリル、トリュフォー）は鬼籍に入った。残されたゴダールもいまや85歳である。「ヌーヴェル・ヴァーグを総括する」と題する本企画は、直接的にはリヴェットの死を契機としている。

通常、ヌーヴェル・ヴァーグは、それ以前のフランス映画における演劇的伝統やセリフの完成度を重視する傾向に異議を申し立て、言語に依拠する心理学的説明を排し、映像による直接的な行動の表現を重視したとされる。

一方、リヴェットは、バルザックの『ランジェ公爵夫人』や「知られざる傑作」を映画化し、また、連作『十三人組物語』を発想源として世界映画史上最長の上映時間をもつといわれる『アウト・ワン』を製作した。

このリヴェットの例に見られるように、ヌーヴェル・ヴァーグの主要な5作家は自国の文学を重要な発想の糧とした。ロメールはクレティアン・ド・トロワとオノレ・デュルフェを映画に移し、シャブリルは『ボヴァリー夫人』を映画化し、ゴダールは膨大な文学作品のテキストを作中に引用し、トリュフォーは登場人物にしばしばバルザックを読ませた。

本企画は、ヌーヴェル・ヴァーグから反＝文学的映画運動という評価をひきはがし、文学と新たな関係を結んだ映画のかたちとして再考する試みである。

その試みにあたって、昨年、『アンドレ・バザン 映画を信じた男』とバザンの古典的書物『映画とは何か』の新訳を上梓して、ヌーヴェル・ヴァーグの父とも呼べる批評家に新たな光を当てた野崎敏氏、そして、『映画とは何か フランス映画思想史』を発表して、映画というメディアの根源的特性について目覚ましい分析を展開した三浦哲哉氏に協力を得られることに感謝したい。

ワークショップ 5月29日(日) 10:00~12:00

ワークショップ1 西2号館4階403

20世紀フランス文学をめぐるアヴァンギャルド的思考

コーディネーター：塚原史（早稲田大学）

パネリスト：熊木淳（早稲田大学非常勤講師）、進藤久乃（松山大学）、前山悠（学習院大学非常勤講師）、門間広明（早稲田大学非常勤講師）

チューリッヒ・ダダ100周年・プルトン没後50年の節目にあたる本年、本ワークショップは、これまであまり論じられてこなかった第二次世界大戦後フランスの前衛（＝アヴァンギャルド）に光を当て、前衛の定義を問い直すことを目的とする。

20世紀初頭、未来派からダダを経てシュルレアリスムに至る前衛の系譜については多くの研究があり、アントワーヌ・コンパニオンを始め多くの研究者がその定義を試みている。しかし、第二次大戦後の前衛はこれまであまり注目されてこなかった。イザベル・クルジウコウスキーの前衛論に見られるように、第二次大戦後フランスの前衛は、直近のシュルレアリスムよりもそれに先立つ前衛の問題意識を継承しているとみなされている。しかしよく見ると、シュルレアリスムもまた第二次大戦後に前衛が再編成されていく流れに深く関わっているのではないだろうか。また、第二次大戦後の前衛たちをより詳しく検証することで、戦前とは異なる前衛のあり方が浮き彫りになるのではないだろうか。

本ワークショップでは、コーディネーターが20世紀前半フランス文学のアヴァンギャルドの展開をダダ・シュルレアリスムを中心にプレイバックした上で、各パネリストが、第二次大戦後のフランスにおいて前衛と対峙したいいくつかの運動体や詩人を取り上げる予定である。具体的には、進藤が第二次大戦後前衛とシュルレアリスムとの関係、前山がコレージュ・ド・パタフィジックとウリボの「反前衛的」性格、門間がシチュアシオニストたちの運動と先行する前衛運動の関係、熊木がレトリズム以降の前衛詩における新たな前衛の概念について論じ、互いに共通する論点をめぐり議論を行う。以上のように、前衛の定義に再検討を促すケースを提示しながら、それが前提としているもの、すなわち20世紀フランスのアヴァンギャルド的思考の要点を明らかにしたい。

ワークショップ2 西2号館4階405

大衆小説研究の現在

コーディネーター・パネリスト：宮川朗子（広島大学）

パネリスト：安川孝（明治学院大学非常勤講師）、市川裕史（津田塾大学）

マルク・アンジュノは、*Les Dehors de la littérature. Du roman populaire à la science-fiction* (2013)において、「文学研究は、その《自明な》対象と考えられうるものの90%以上を遠ざけること——この先決的な別扱いについて何の弁明もせず、問いたずこともしない——から始める唯一の学術的領域、《人文学》と呼ばれるもののなかで唯一の領域である。」と文学研究における、いわゆる「純文学」偏重の傾向を指摘している

とはいえ近年、大衆小説は、徐々に博士論文や研究論文の対象となり始めている。そして大衆小説全般を対象とする文学研究誌の発行、研究サイトや大衆小説関連事項の検索サイトの設置など、大衆小説研究も、活況の兆しをみせている。

そこで本ワークショップでは、まず安川が、大衆小説再評価の動向が活発になる1990年代以降の研究の潮流を紹介した後、それぞれの発表者が、関心を寄せる小説、小説家を取り上げて論じる。

安川は、テキスト解釈における読者の主体的な参加の可能性を探り、大衆小説は一元的で受動的な読みを想定しているという支配的な評価に再考を迫る。

続いて宮川が、ゾラの『マルセイユの秘密』とこの小説を連載した『プロヴァンス通信』との関係、連載版と書籍版との間に見られる違い、さまざまな書籍版の出版をめぐる問題を提起しながら、この作家が時折大衆的と目される原因を探る。

最後に市川が、ヴィルジニー・デバントとパトリック・ウドリーヌを例にして小説と大衆文化（とりわけパンクロック・カルチャー）との関係を考察する。

三者三様の発表ではあるが、それはとりもなおさず「大衆」という言葉がもつ問題性ゆえである。会場との意見交換を通し、「大衆性」をめぐる問題や大衆文学の可能性について議論を深めることができたら幸いである。

ワークショップ3 西2号館5階506

Théâtre Langue Étrangère

コーディネーター：ティエリ・マレ（学習院大学）

パネリスト：フランソワ・ビゼ（東京大学）、井上由里子（立命館大学非常勤講師）、宮脇永吏（学習院大学非常勤講師）

Si le théâtre consiste en paroles proférées sur la scène, il ne s'ensuit pas nécessairement qu'on y parle notre langue. Dès l'origine en Grèce, les barbarismes, voix des Barbares et mots barbares, ont résonné dans l'espace dramatique, chez les Perses d'Eschyle ou les Triballes d'Aristophane. On sait qu'une étymologie possible du mot « farce » se rapporte au mélange des langues, ressurgissant au finale des comédies-ballets de Molière aussi bien que dans les pratiques les plus récentes du théâtre contemporain.

C'est cette étrangeté des idiomes de théâtre que cet atelier se propose d'aborder : glossolalies, accents, mots inventés, propos inintelligibles, expressions décalées, à travers quelques œuvres ou quelques figures. Claudel ou Guyotat, Koltès, Beckett, Novarina, Mnouchkine ou Peter Brook, Artaud peut-être...

ワークショップ 5月29日(日) 10:00~12:00

ワークショップ4 西2号館5階504

恐怖・嫌悪・欲望とジェンダー

コーディネーター：高岡尚子（奈良女子大学）

パネリスト：玉田敦子（中部大学）、中川千帆（奈良女子大学）、倉田容子（駒澤大学）

ひとはなぜお互いを恐れ、嫌悪あるいは憎悪し、ときにはそれを理由に争い、傷つけ合うことになるのか。世界が狭くなり複雑になった今日、この問いは、私たちの日常の其処此処にあって、のど元を締め付けるような息苦しさを抱いて迫ってくる。本ワークショップでは、この問いに、社会の近代化とジェンダーの観点から取り組んでみたい。

そもそも、近代における国民国家は、ひとと社会のジェンダー化を基礎として成り立っており、その結果、私たちの生きる世界も隅々に至るまでその影響を被っていることを、これまでの研究が明らかにしている。また、ジェンダーの視点をうい「恐怖・嫌悪・欲望」について考えるということは、単に、性別による役割の規範やその成り立ちを明らかにするだけでなく、こうした「心の動き」とみなされるものが、実は、個人的なものではなく社会的なものであり、イデオロギーとして、さらには文化的コードとして「構造化」されているのだという視座を提供してくれるだろう。

本ワークショップの特徴は、こうした目論見を共有しながら、コーディネーターとパネリストが、それぞれ異なった専門分野で得た知見を報告する点にある。まず、コーディネーターの高岡が、近代社会（主にフランスと日本）におけるジェンダー化の道筋を示す。続いて、3名のパネリストがそれぞれ「モンテスキュー・女性・国家—フランス啓蒙とミソジニー」（玉田／フランス文学）、「フランスから来た美魔女—ポーの「眼鏡」と帝国」（中川／アメリカ文学）、「〈例外状態〉における女の身体—三枝和子の諸テキストにおける生殖と性暴力」（倉田／日本文学）というタイトルのもとに、性をめぐる「恐怖・嫌悪・欲望」の原動力と破壊力、さらには破壊の影響を提示する。

ワークショップ5 西2号館5階503

マルグリット・デュラス没後20周年——21世紀におけるデュラス

コーディネーター：関末玲（愛知大学）

パネリスト：小川美登里（筑波大学）、桑田光平（東京大学）、澤田直（立教大学）

2016年はマルグリット・デュラス没後20周年を迎える節目の年であり、ヌーヴォー・ロマンの一騎手として、あるいは戦争文学、ポストコロニアル文学批評、ジェンダー文学研究などの論点から分析される作品として、つねに「現代文学」を牽引してきたデュラスを、包括的な視点から読み直す作業が求められている。プレイヤード全集の刊行により文学、映画脚本、演劇作品を網羅的に捉えることが容易となった21世紀において、文学の伝統という系譜のなかでデュラス作品をどのように位置づけるのか、再定義することが可能ではないか。

パネリストの小川美登里は、ヌーヴォー・ロマン以前の文学史とデュラス作品を接続すべく、まずは、デュラスの作品創造に深い影響を与えたと考えられるマルセル・ブルーストとヘンリー・ジェイムズに触れる。さらに、海を背景とする物語を流動的で反復的な海のごときエクリチュールで覆い尽くすデュラス独自のスタイルが、海や植民地、琉球や漂流をテーマとする（南洋）文学の系譜に結びつけることが可能であるかどうかについて検討する。

桑田光平は、バルトに対して終始距離を保ち続け、「退屈である」とまで公言していたデュラスのバルト評価を検討し、デュラスとともにバルトを読むこと、そして、バルトとともにデュラスを読むことを通して、「書くこと」と「生きること」の関係について考察を試みる。

澤田直は、デュラスのテキストおよび映像作品に見られるカタルストフ、廃墟、破壊といったモチーフに着目し、それらのテーマを他の作家、思想家、芸術家との関わりをなかで読み解くことを試みる。

本ワークショップは、これまでいち早くデュラス作品の翻訳を手掛けてきた日本のフランス文学研究から新たな読解を発信し、デュラス文学の今日的意義を改めて議論する場となるべく、文学史全体のなかでデュラス文学の広義の理解を目指すものである。

特別講演 5月29日(日) 13:00~14:45

西2号館3階302

Les Victimes du livre

José-Luis DIAZ (Université Paris-Diderot)

Sous ce titre repris à Jules Vallès (*Figaro*, 9 octobre 1862, puis *Les Réfractaires*, 1865), il s'agira de mettre l'accent sur l'influence qu'a pu avoir la littérature sur la vie de ses lecteurs au XIX^e siècle, soit donc à une époque où, changeant de statut après la révolution romantique, elle acquiert une force perlocutoire sans précédent. Influence nocive parfois, voire destructrice comme le suggère Vallès ; mais souvent en tout cas déterminante, tant est grande alors la capacité pragmatique qu'elle a acquise grâce à sa sphère d'activité élargie et à son statut médiatique nouveau.

Mais Vallès n'est ni le seul, ni le premier à proposer une telle analyse, puisqu'on en trouve des éléments chez d'autres critiques du XIX^e siècle dont il conviendra de faire l'appel : Mme De Staël, Sainte-Beuve, les Goncourt, Elme Caro, etc. Tous s'accordent à penser qu'en cet âge de « vitalisation de la littérature » certains grands écrivains (Goethe, Chateaubriand, Byron, Musset, Balzac, Sand, Murger) ont proposé des modèles existentiels contagieux, tant par leur style de vie propre que par celui des personnages de fiction qu'ils ont créés. Il s'agira donc de rappeler, mais aussi de systématiser de telles analyses, qui tendent en quelque sorte à démontrer la réciproque de l'axiome de Bonald, sur la littérature comme expression de la société.

Si on tend à penser alors que la littérature a une influence sociale, c'est qu'il y a eu, au cours de la période romantique, une révolution majeure affectant la sphère d'influence de la littérature. Elle cesse d'être affaire purement livresque pour être en prise directe sur l'expérience vitale. Et les écrivains ne sont plus seulement des maîtres à penser, mais aussi des maîtres à vivre.